

KAKIEMON

THEMATIC EXHIBITION

THE WORLD OF KAKIEMON PORCELAIN

In the second half of the 1600s, Japanese artisans developed a new type of porcelain. Known as Kakiemon ware, it featured designs painted in vivid enamels, dominated by red, on a milky-white ground. These wares were exported in large numbers to Europe, where they were prized by aristocrats and royalty in the Netherlands, England, France, and Germany. They were valued not only for practical use but also as ornaments in mansions and palaces.

This exhibition focuses on works in the Kakiemon style while also presenting a broader view of related objects. These include early export wares, luxurious “gold-brocade” porcelains, and Chinese reproductions of Kakiemon ware from the 1700s. We invite you to explore the world of Kakiemon ware and its ties to the wider world.

伊万里焼 柿右衛門 の世界

2025 11/11 (火)～2026 2/8 (日)

東京国立博物館 本館 14 室

特集



17 世紀初め、肥前有田地域（現在の佐賀県有田町）では日本で最初の本格的な磁器生産が始まり、これらは近くの伊万里港から運び出されたことから伊万里焼と呼ばれます。17 世紀半ばになると、有田地域では輸出向け磁器の生産が始まります。輸出伊万里焼は当初、内乱により輸出が減少していた中国・景德鎮産の磁器を補うようにつくられていましたが、やがて中国の模倣にとどまらない独自の様式が確立していきます。その代表が、乳白色の素地に、赤を主とする明るい色絵具を用いて余白のある構図で描く、いわゆる「柿右衛門様式」と称される磁器です。これらはヨーロッパに数多く渡り、オランダ、イギリス、フランス、ドイツなどの王侯貴族たちに受容され、実用だけでなく屋敷を飾る装飾品としても用いられました。

本特集では、こうした柿右衛門様式を中心に、輸出初期の作品から、有田周辺でつくられた上質な磁器、金襴手様式への移行期の作品、そして 18 世紀に中国でつくられた「柿右衛門写」と呼ばれる作品までを、広く「KAKIEMON」ととらえ、ご紹介します。日本陶磁史のなかでも世界とのつながりの深い、伊万里焼柿右衛門の世界をお楽しみください。

いろ え かさじんぶつもんたい こ
色絵傘人物文大壺

Large Jar with Figures, One Holding an Umbrella

伊万里（柿右衛門様式） 江戸時代・17 世紀 G-5110

世界と出会った伊万里焼
——初期の輸出色絵磁器

The World Encounters Imari Ware:
Early Examples of Polychrome Export Wares

日本で最初の磁器をつくった肥前有田地域では、1640年代後半になると、上絵具で彩色を施した色絵が誕生します。色絵は「赤絵」とも呼ばれ、有田の陶工・初代酒井田柿右衛門が記した『赤絵初りの「覚」』には、技術が中国から伝わったと記されています。同じ頃、ヨーロッパの王侯貴族の間では、中国の磁器が大流行していましたが、明時代末から清時代初めの王朝転換の動乱を経て、清朝は1659年に海禁令、1961年に遷海令を発布して貿易を中止します。中国貿易を担っていたオランダ東インド会社は、中国に替わる輸入先として有田に予先を転換し、有田では1659年から輸出品生産が本格化しました。

ヨーロッパで愛された KAKIEMON
——いわゆる「柿右衛門様式」

Japanese Porcelain Admired in Europe: The Kakiemon Style

ヨーロッパ向け輸出が軌道にのった1670年代に入ると、輸出伊万里は中国磁器の模倣から脱した、日本独自のスタイルを確立します。おもな特徴として、「濁手」*と呼ばれる乳白色の素地、朱色に近い赤を中心とした鮮やかな色絵具、左右非対称の絵画的な構図による繊細な絵付といった点が挙げられ、器種は、皿鉢、壺のほか、型を用いた彫像、水注など多岐にわたります。これらは酒井田柿右衛門窯で完成されたと考えられ、「柿右衛門様式」と呼ばれてきました。ここでは、ヨーロッパで類例が伝わっているものを中心に、柿右衛門様式の多彩な作例をご紹介します。

※濁手：米のとぎ汁の濁りの色に似ていることからついた呼び名とされています。



いろ え ぶ どう り す もんりさごがたすいちゅう
色絵葡萄栗鼠文瓢形水注
Gourd-Shaped Water Pitcher with a Squirrel and Grapes
伊万里（柿右衛門様式） 江戸時代・17世紀 G-5027



いろ え すかしほり か ちゅうもんさ
色絵透彫花鳥文皿
Set of Dishes with Birds and Flowers
伊万里（柿右衛門様式） 江戸時代・17世紀 G-59



いろ え か き もんおざら
色絵花卉文大皿
Large Dish with Flowering Plants
伊万里 江戸時代・17世紀 G-5804



いろ え たけとらもんはっかくほち
色絵竹虎文八角鉢
Octagonal Bowl with a Tiger and Bamboo
伊万里（柿右衛門様式）
江戸時代・17世紀 G-649



いろ え ぞうがたこうろ
色絵象形香炉
Elephant-Shaped Incense Burner
伊万里（柿右衛門様式）
江戸時代・17～18世紀 G-188



いろ え うもんすいちゅう
色絵雲文水注
Water Pitcher with Clouds
伊万里 江戸時代・17世紀 G-5744

東博の KAKIEMON

KAKIEMON Ware at TNM

日本陶磁史研究における輸出伊万里焼は、「海外に輸出されたもの」と「国内に伝わってきたもの」（生産地、消費地遺跡の出土品も含む）とを比定しながら、様式や制作の編年といった詳細が明らかにされてきました。前者については、とくに1970年代以降、海外で購入した輸出品を日本へ持ち帰る「里帰り」が盛んになり、図版や展覧会で紹介されるなどして理解が深まり、輸出伊万里焼研究は一段と進展しました。

東京国立博物館（東博）の収蔵品には、古くは明治初期の博物館草創期から収められているものが含まれます。これらは貴重な国内伝世品として位置づけられ、里帰り品や発掘調査の成果などとあわせた研究対象として、大事な役割を担ってきました。



いろ え しょうちくばい ぼ たんほうおうもんおざら
色絵松竹梅牡丹鳳凰文大皿
Large Dish with a Pine, Bamboo, Plum Tree, Peonies, and Phoenixes
伊万里（柿右衛門様式） 江戸時代・17世紀 G-4790



いろ え きくすいもんふたもの
色絵菊水文蓋物
Lidded Bowl with Chrysanthemums in a Stream
伊万里（柿右衛門様式） 江戸時代・18世紀 G-4959

有田窯と KAKIEMON
——染付も含む上質磁器

The Arita Kilns and Kakiemon:
Blue-and-White and other
High-Quality Porcelains

柿右衛門様式が確立した1670年代には、柿右衛門窯を含む有田南川原地区（現在の有田町西部）一帯において、上質な高級磁器がつくられました。ここには色絵だけでなく、染付を含むものも含まれます。色絵柿右衛門様式と同様の、良質な磁土、型打ち成形によるシャープな作り、そして精緻な絵付は、染付のみであらわされた作品にもみることができ、こうした作品は青い（藍）色の柿右衛門として「藍柿」とも呼ばれます。



いろ え うめ らい う もんおおばち
色絵梅に雷雨文大鉢
Large Bowl with a Plum Tree and Thunderstorm
伊万里（柿右衛門様式） 江戸時代・17世紀 G-909



重要文化財
いろ え か ちゅうもんおふかばち
色絵花鳥文大深鉢
Large Deep Bowl with Birds and Flowers
伊万里（柿右衛門様式）
江戸時代・17世紀 G-5101



いろ え おうりゅうもんとうばん
色絵応龍文陶板
Tile with a Winged Dragon
伊万里（柿右衛門様式）
江戸時代・17世紀 G-5030

作品リスト



金襴手様式への移行

—元禄柿

Transition to the “Gold Brocade” Style:
Kakiemon Ware of the Genroku Era

元禄年間（1668～1703）に入ると、色絵磁器の様式には変化がみられます。巨大な富を蓄えて台頭してきた豪商たちが、中国・明時代の金彩を多用した豪華絢爛な金襴手を愛好するようになり、有田でもその需要に応えるべく、金襴手に取り組みます。その移行期につくられたのが、いわゆる「元禄柿」と呼ばれる作品群です。これらには、伊万里焼としては珍しい紀年銘「元禄六年」「八年」もしくは「十二年」と、柿右衛門窯を意味する「柿」が染付で記されており、制作年から六代柿右衛門の後見であった酒井田洪右衛門の関与が考えられています。

※東博では、元禄8年と12年の作品を収蔵しています。

いろ え きんらん で からはなもんさら

色絵金襴手唐花文皿

Dish with Karabana Flowers

伊万里、「元禄八乙亥 柿」染付銘

江戸時代・元禄8年(1695) G-5795



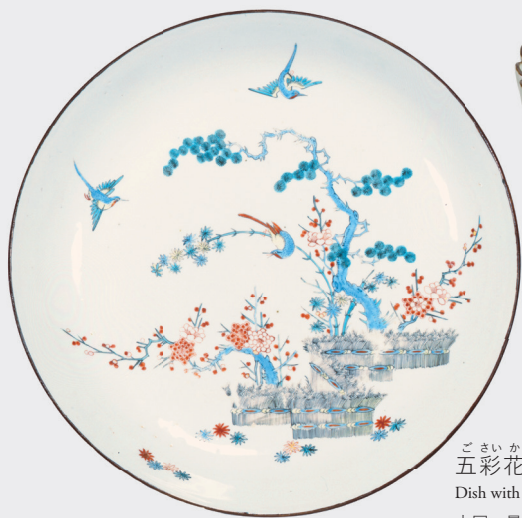
いろ え はなからくきもんさら

色絵花唐草文皿

Dish with Floral Vines

伊万里、「元禄十二年 柿」染付銘

江戸時代・元禄12年(1699) G-5714



ごさい か ちようもんりん か ばち
五彩花鳥文輪花鉢

Lobed Bowl with Birds and Flowers

中国・景德鎮窯 清時代・18世紀

広田松繁氏寄贈 TG-2660

ごさい か ちようもんさら
五彩花鳥文皿

Dish with Birds and Flowers

中国・景德鎮窯 清時代・18世紀 広田松繁氏寄贈 TG-2659

世界で写された KAKIEMON

—清朝の柿右衛門写

Kakiemon Reproduced Abroad:
Qing-Dynasty Copies of Kakiemon

中国では、1684年に遷海令が撤回され、清朝は海外との貿易を再開します。磁器輸出も再び活況を取り戻すなかで、景德鎮窯では当時ヨーロッパで人気を博していた日本の磁器、伊万里焼を写した「チャイニーズ伊万里」が誕生します。ここでは、そうした流れのなかでつくられた清朝時代の「柿右衛門写」と呼ばれる2作品を紹介します。

ヨーロッパの写

Copies Made in Europe

ヨーロッパでは長らく、磁器は東洋からの輸入品しかなく、強い憧れをもって扱われました。そして、18世紀になると、ヨーロッパでも「柿右衛門写」が取り組まれます。ザクセン選帝侯国（ドイツ）の選帝アウグスト強王は、1710年にマイセンに磁器製作所を創設。東洋磁器の蒐集に熱心であった強王は、柿右衛門様式をはじめ、日本や中国の磁器に倣った製品をつくらせました。またフランスでは、柿右衛門様式の磁器を好んで蒐集していた貴族ルイ4世アンリ（コンデ公）の指示により、1725年頃、パリ郊外北部にあるシャンティイの街にシャンティイ窯が開窯。ここでも、柿右衛門写の作品がつけられました。

いろ え かちようずさら かきえもんうし
色絵花鳥図皿（柿右衛門写）

Dish with Birds and Flowers (Kakiemon Style)

フランス、シャンティイ 18世紀 G-4953



いろ え じんぶつ か ちようもんろっかくぼ かきえもんうし
色絵人物花鳥文六角壺（柿右衛門写）

Six-Sided Jar with Figures,
Birds and Flowers (Kakiemon Style)

フランス、シャンティイ 18世紀
九州国立博物館 出典：ColBase

※この2作品の展示はありません。